

『花濱涙帖』と『清風集』

—江戸時代後期絵画史資料二点

山田 烈

はじめに

ここで取り上げる二件の資料は、いずれもすでによく知られたもので、『花濱涙帖』はしばしば論文に引用され、『清風集』は『本庄市史』資料編¹に影印が収録されたが、それらの詳しい内容や美術史的な検討はほとんどなされていない。江戸時代三分法を繰り返し説かれて、十八世紀こそ最も江戸らしいとされる中野三敏氏によれば、文化年間は「雅なるものの完全な成熟期」という。まさしく『花濱涙帖』はそれを立証する一資料と言えよう。また『清風集』は、収録画人詩人の数の多さからも天保期の関東画壇および文芸界の動向をうかがうには貴重な資料と言えよう。ともあれ以下において、化政から天保への四半世紀の江戸時代後期絵画史における関東の動向をうかがえるこれら二つの詩画集をやや詳しく見てみたい。

一 江戸時代後期絵画史と文人

荻生徂徠以降、詩文を主とする文芸の市民権が著しく認められるようになり、文化文政期すなわち十九世紀の前半は「古文辞格調説から清新性靈説へ」の大きな流れが見られた。³すなわち、粗雑に簡単に言つてしまえば、漢詩の世界における唐風から宋風への移行がそれである。それに呼応して江戸絵画史はどのように展開したか、その関東における状況の一端を探る資料を紹介するのが本稿の目的である。

中国の南宋画、文人画を日本流に受容し定着した南画の歴史は、十八世紀の

祇園南海や柳澤淇園らのいわゆる初期南画から池大雅や与謝蕪村らのすぐれた画家の活躍を経て、早くも世紀の後半には江戸と関西との二大文化圏において、それぞれ多数の画家が登場して画壇を賑わした。その一方で、全国各地への文人の遊歴が日常的に行われるようになつた。遊歴とは、揖斐高氏によれば「詩・書・画など文雅風流を生活手段にした文人たちが、地方の裕福な町人や地主などのもとに寄寓しながら、詩・書・画などおのれの得意とする文雅風流を揮毫・教授して旅の生活をすること」であるが、森銑三氏はこれを「出稼ぎ」と簡潔に一言で言い表された。いわば「文人」とは、やや露骨に言えば江戸文化史においてはセールスマンの肩書きあるいは名刺のような役割を果たすようになつた。その背景には、当然「中央」と「地方」との緊密な関係が築かれていることが前提となる。

これに関連して中野三敏氏は、寛政から文化文政期における目立った現象として「詩文家たちの生活ぶりの卑俗化」を挙げられる。⁵具体的には、大窪詩仏、菊池五山、柏木如亭らの名前が出されている。卑俗化、通俗化ということは、逆に言えば共通項の裾野が広くなつたということで、つまり批評を生み出すジャーナリズムの基盤がさらに強固となつたことを意味する。絵画批評という点では、いわゆる画論が中国直輸入から次第に自前の論評が見え始め、桑山玉洲、田能村竹田らの著作が生まれ、書画の鑑賞あるいは鑑定という面では、書画会が頻繁に開かれて活発化する。それに伴つて、江戸時代後期には作品発注と享受の形態における作品そのものの変容過程も問われるべき課題となる。

すでに田中優子氏や高橋博巳氏の著書⁶にもあるとおり、江戸文化のキー・ワードである「ネットワーク」の具体的な様相が、近年さまざまな事例で明らかにされつつある。揖斐高氏の一九七八年の論文「化政期詩人の地方と中央—佐羽

淡斎を中心に⁷は、それまでの郷土史研究と「中央の」動向のみに視点が行きがちであった研究とにやや分離した状況を打破する「中央でも地方でもない」両者に目配りの行き届いた視点から淡斎をとらえた意欲的な論考である。

南画あるいは文人画の分野においては、文芸界の動き、特に漢詩の動向と書きあわめて密接な関係があることは言うまでもない。日本近世漢文学の研究においては、中国文学研究者、近世漢文学研究者の比較文学的側面は当然のこととして、そのほか西洋文学の専門家からの日本近世文学への新たな視点、鑑賞という面も大きな位置を占めていることは見逃せない。⁸ 雜駁に言つてしまえば、萩原朔太郎の『郷愁の詩人与謝蕪村』などは、近代の蕪村研究に重要な一石を投じたものであるし、石川淳の江戸文学への造詣の深さはよく知られている。漢詩の分野においては、リルケやホフマンスター、あるいはボーデレールやネルヴァルといった作家の専門研究者による江戸漢詩を見直す業績が高く評価されている。その場合、ボーデレールやマラルメといった西洋の超一流の詩人と江戸漢詩との比較というよりも、どちらかというとややマイナーな詩人との比較が興味深い。揖斐高氏も言及されているが、永井荷風が渡欧中にアンリ・ド・レニエに共感したことと、後に『下谷叢話』ほかにおいて館柳湾の漢詩を特に愛読したことなどを述べている点は、当然荷風自身における内面的な関連がうかがえる。また多くの詩人の集会や活発な批評活動あるいは隅田川舟遊と印象派の画家たちとセーヌ川など、西洋と日本とで相似した現象が見られることは確かであるが、一方的に類似の面だけを強調するわけにもいかない。

ともあれ本稿は江戸時代後期の関東画壇、特に南画の分野における動向の一端を探ることを目的とするが、ここではこれまでやや不正確に扱われてきた文献や碑文のテキストとその簡単な注釈という資料紹介の形にとどめ、別稿において個々の作家、作品、ならびに注文者、享受者のいわゆるパトロン的役割等について具体的に考えたい。したがって、作品論はもちろん、特定の課題の論証や考察はすべて省略する。

佐羽淡斎（一七七二～一八二五）が、桐生の文芸史上に突然登場したわけではなく、その前史を成す人物が少なからずいる。揖斐高氏は、その中から長沢紀鄉（一七五〇～一八〇〇）と栗田逸斎（一七九二～一八四三）の二人を取り上げられている。前者は、寛政四年（一七九二）に二十一歳で夭折した子の遺稿詩集『幼公詩草』を江戸で出版し、その出版記念会を催している。後者は、文化十一年（一八一四）に江戸で『逸斎百絶』を出版し、やはり記念会を開いている。その出席者のうち淡斎と関連の深い人物は、増山雪斎、亀田鵬斎、山谷本綠陰、朝川善庵、糸井榕斎、館柳湾、海野蠖斎、大窪詩伝、宮沢雲山、谷文晁、喜多武清、五十嵐竹沙、鍬形蕙斎、春木南湖、鏑木雲潭、大西圭斎、稻毛屋山、酒井抱一、雲室、細桃など多数挙げられる。桐生に淡斎を訪問した人物としては、享和元年（一八〇二）の亀田鵬斎、文化八年（一八一二）の市河寛斎、文化十二年（一八一五）の柏木如亭（一七六三～一八一九、如亭はすでに寛政五年に長沢紀鄉を訪問している）などが知られる。それらを念頭において、以下淡斎について述べたい。

まず初めに佐羽淡斎の読みであるが、図書館の検索データにおいて佐羽をサワとしているものが現在でも見受けられる。『森銑三著作集』続編別巻索引も佐羽をサワと配列している。ただし、森銑三氏自身は、佐羽淡斎の出身地桐生まで調査に訪れたことがあり、サバと正しく読まれている。しかし、正しい読みが一度に定着することなく、近年でもなお、たとえば『江戸漢詩選』⁹ 文人』の解説の中で、徳田武氏は佐羽にサワヒルビをつけられている。¹⁰ この点については、すでに早く浅野梅堂は『寒繁璫綴』において、佐羽をサバと読むことにやや詳しく言及している。¹¹

桐生市淨運寺の佐羽淡斎の墓石は、まことに簡素で正面に「幽誉指月淡斎居士 蘭譽化德芳室法尼」と夫妻の法号を記すのみである。淡斎の略歴を知るには、同時代史料という点からもまず朝川善庵（一七八一～一八四九）による墓記が挙げられる。本文はすでに『桐生市史』にも掲載されているが、少なからず誤りがあり、揖斐高氏の前記著書にも墓碑の写真は掲載されている

二 佐羽淡斎と『花濺涙帖』

が、内容の説明はなされていないので、ここに全文を挙げておきたい。碑は縦一八・三cm横五七・六cm、本文の上に一字ずつ枠を設けて二字三行として「詩人淡斎之墓」とある。本文は最初の二行を除いて、十九行で一行三十九字から成る。

桐生故詩人佐羽淡斎君墓記

江戸朝川鼎撰 常陸大窪行書并題額 孝子元澄立

是為桐生故詩人佐羽淡斎君之墓、君姓佐羽、諱芳字蘭卿、号淡斎、其堂曰善義、上毛桐生人、自其父祖以財雄於一郷、君亦能幹蠱、家業益振、其日倚市門、時稽側物、化其小大、通以有無、常思奇貨之可居、每狡秋毫之必朽、不損於人以益於己、衆其奴婢、多其牛馬、広其田宅、博其產業、吾知其為良賈矣、嗜文好客、最能憐口、汎愛厚施、急於救乏、不待魯公之乞米已見衛尉之許賑、何啻涸鱗去轍、亦是蟄蟲啓戶、於是乎深林之、校鷁栖自安、万里之程、鵬羽遂振、乃至隣里鄉東所識窮乏之人、皆能安生興產、亦賴分惠施恩、吾知其為義人矣、其在江戸、春則探梅杉田、曳枯筇、披短簾、冒雨雪於數程、秋則泛舟墨江、吹參差、歌宛轉、占風月於一家、或又僂紅擁翠、結綺夢於巫山、傾銀注玉、捲白波於鯨海、南樓弄月、不知漏之已尽、北里賞華、深惜春之將殘、其丰神清爽、性度快豁、人皆為烟花總管、君自謂風月主人、吾知其為風流人豪矣、性好山水、癖耽烟霞、吉野嵐山之華、須磨赤石之月、金華之靈妙、日光之佳麗、松島天橋之以勝蹟、妙義榛名之以奇名、其他靈境奇跡、雖兔穴鳥道往来所絕、亦蛇行鼈步、探討必窮、當其在家、則別構十山亭、聚遠於四窓、採勝於一室、嫌臥遊之非真、喜縱觀之得意、吾知其為高逸士流矣、而今独以詩人称之何也、夫詩以性情為主、性情一正、其詩自善、君之詩能得其性情、遂以之行賈、故良、以之為人、故良、以之為人故義以之弄風月、故風流才子、以之遊山水、故高逸士流、皆其性情之見事業、亦詩能為之也、故意與境適、往々寄諸吟詠以自見焉、其菁莪堂集三篇、嚮既梓行、可以見性情所寓矣、又名山勝地、所到輒立詩碑、每謂人曰、吾一生之間、必當立百碑以存遊踪矣、其所立僅至十一而沒、惜哉、文政乙酉七月四日以病卒、年五十四、葬於鄉之淨運寺先塋側、娶福田氏、一男三女、其子元澄立石請記於鼎、鼎與其友人大窪行山本謹奥山翼等相議、題曰桐生詩人佐羽淡斎之墓、併記

其由、鼎不佞雖不能好其辭、以副地下之意、而詩人之目、君其許我哉、文政八年乙酉冬十月

（一八一四）八月に建てた十山亭詩碑や泉岳寺の龜田鵬斎による文政二年の赤穂四十七義士碑にも見える。朝川善庵の文の内容は、淡斎の人となり、佐羽家の繁栄、文芸愛好、詩人としての活躍、詩碑の建設などを述べてはいるが、淡斎の生涯を全般的に語るものではない。何よりも『花濱涙帖』については、全く言及されていない。なお、現在この墓碑の向かつて右横にこの碑を建てた元澄（淡斎の後を繼ぐ分家の三世吉右衛門、一八〇九～一八六八）のために佐羽竹香之碑が並んでいる。

上記の善庵の文に欠けたところを補うと、淡斎は佐羽本家の清右衛門道純の次男で、分家の吉右衛門道西の養子となつた。絹仲買商としての豊かな家産を背景に、亀田鵬斎、山本北山、大窪詩仏、菊池五山など江戸の文人墨客と交わり、自らも漢詩人として活躍し、山本北山の門人館海庵（斎藤天籟）を招聘して翠屏吟社の設立を促すなど、地元桐生に詩壇を形成するにあたつて大きな役割を果たした。詩人としての活動は明確に把握できるが、画贊を初めとする画家との交流を具体的に示す資料がきわめて少ないので意外である。¹⁴ 現在、津久井雨亭とともに喜多武清の春秋草図二幅対に着贊したものが地元に伝わった稀な例である。その他には、淡斎の子竹香の時代に淨運寺に納められた酒井抱一筆秋草花卉図と谷文晁筆孔雀牡丹図（元は衝立かと思われる）、桐生天満宮本殿天井画の喜多武清筆雲龍図、書上文左衛門旧藏と伝えられる、同じく武清筆秋草図屏風（曲一隻などが挙げられるに過ぎない。¹⁵ 佐羽淡斎の著作および彼が深く関わった主な版本は以下のとおりである。

『宋方秋崖詩抄』文化二年（一八〇五）、大窪詩仏・佐羽淡斎校訂

『淡斎百絶』文化六年（一八〇九）、佐羽淡斎著、山本北山・菊池五山・大窪詩仏の序文

『桐鄉風雅集』享和二年（一八〇二）、佐羽淡斎編、山本北山および斎藤天籟の序文

『宋三家絶句箋解』文化九年（一八一二）、大窪詩仏・山本緑陰著、佐羽淡斎注釈

『淡斎百律』文化十年（一八一三）、佐羽淡斎著、市河寛斎・菊池五山・大窪詩仏の序文

『桐生才子詩』文化十年（一八一三）、中村松崖編、大窪詩仏・館海庵（斎藤天籟）の序文、佐羽淡斎の跋文

『菁莪堂集』文化十二年（一八一五）、佐羽淡斎著、亀田鵬斎・菊池五山・大窪詩仏の序文

これらを見ても、淡斎が北山、詩仏、五山の系譜に連なることが一目瞭然である。

『花濺涙帖』の成立直前の文化七年（一八一〇）と八年には、淡斎は箱根に遊び、特に前者では芦の湯詩碑を建てている。その同行者は『花濺涙帖』所収の人物と重複するので、その内容を伝える山本北山の碑文を挙げておきたい。

「蘆湯者管根温泉也、能医痼起廢、文化庚午秋、佐羽蘭卿、木百年、絲井君鳳、大窪天民、吾婦細桃、男謹、喜多武清、谷文一、同遊於斯、賞愛霞泉石不凡、

各作詩以賦其勝蘭卿与謹立石勒之於碑面天民書更使武清、文一及其師谷文晁各画魁星像碑陰以長保護此山之雅云 北山山本信有題」。庚午は七年。なお漢詩は、淡斎のほかに木百年、糸井榕斎、大窪詩仏、細桃（山本北山の妻）、山本緑陰（山本北山の子）の五人によるもので、いずれも七言絶句である。また八年のメンバーは詩仏、緑陰、木百年、榕斎、武清らである。

『花濺涙帖』というタイトルが当初からのものかどうかについては、確定で

きないが、今回取り上げるもう一つの詩画集『清風集』が谷文晁と春木南湖の題字のとおり書名となっていることからも、増山雪斎の題字をそのまま書名としてよいのではないか。いずれにせよ、その言葉は有名な杜甫（七一二～七七〇）の詩「春望」（七五七年の作）からとられている。「国破山河在 城春草木深 感時花濺涙 恨別鳥驚心 烽火連三月 家書抵万金 白頭搔更短 淮欲不勝簪」がそれである。松尾芭蕉が『おくのほそ道』の平泉のところで、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と一部変えて引用していることもよく知られている。また「花濺涙」の読みについては、長く「花にも涙を濺ぎ」というのが定着しているが、「花は涙を濺ぎ」という読みを吉川幸次郎氏が提

示されたことについて、小川環樹氏が論じてはいるので、本稿の論旨と深く関わることではないが、ぜひ参考願いたい。¹⁶

なお、東京都立中央図書館加賀文庫本が『雨桜帖』の書名をついているのは、竹翁の辞世の発句に「あめのさくら」とあり、それを受けての市河寛斎の序文と亀田鵬斎の漢詩に「雨中桜花」の文字が見えるところからかと思われる。¹⁷

表紙の題簽は、「惜花帖」（桐生市立図書館本¹⁸）、「雨桜帖」（東京都立中央図書館本）、「花濺涙帖」（東北大学附属図書館本）とそれぞれ異なつており、いずれも刊行当初からの姿とは思われない。今後さらに別本の紹介がなされれば、また新たな書名が登場するかも知れない。ともかくこれら三冊は、タイトルのみではなく、木版本通例の刷りの状態以外に、内容構成、各作家の印章の有無あるいは種類等々の点で、かなりの相異を見せてはいる。以下、桐生市立図書館を中心いて、それらの相異についてもおおよその概要を報告したい。

題字は伊勢長島藩主で画家でもあつた増山雪斎（一七五四～一八一九）による。

「花濺涙」の大字と「壬申孟夏月書於有竹屋 石顛翁（印）（印）」があり、壬申は文化九年（一八一二）、孟夏月は四月である。なお、『花濺涙帖』中の年記は、これと鏑木雲潭の「壬申晚春雲潭画」の二つのみである。

序文は、山本北山（一七五二～一八一二）と並ぶ儒者ならびに漢詩人で江湖詩社を設立した市河寛斎（一七四九～一八二〇²⁰）による。

文化壬申春二月十九日桐生佐羽竹翁以病終於家先是數日翁偶詠雨中桜花國歌蓋其傷衰残之情漏於天機果為其識穎才淡斎深哀其意□和而廣之以成翁之志遍乞知友詩之画之又謁其師北山先生序言刻未成先生亦損館舍以其知翁者独有予在乃代其事鳴呼鳥声然人言善聖人既速之易寶之語絕筆之詠寓之有声無声之間以廣其意□□翁死而不朽矣淡斎友于之誼可以為教也詩云凡今之人蓋如兄弟淡斎有焉
寛斎老人寧

三亥書

これによれば、当初は山本北山の序文が掲げられるはずであったが、まさに

この年北山が没したので、代わつて寛斎が執筆したものとわかる。時に市河寛

斎六十四歳、寛斎の文章を市河米庵（一七七九～一八五八）が代筆するのは、

享和元年（一八〇一）刊行の柏木如亭の『聯珠詩格訳註』の場合にも見える。²¹

次に佐羽竹翁の発句「寝こころをあめのさくらになやみけり」が掲げられる。

竹翁は生年未詳、清右衛門道純の長男、佐羽本家の七代目となつた。

桐生市立図書館本では、その後に三十四人の絵と詩が、一部順序が乱れるが下記のとおり交互に掲載されている。絵画作品は、すべて桜をテーマとする一連の変奏曲で、満開の様子から風雨に散りゆく姿が、遠景から一枝のクローズ・アップまで、様々に描かれる。

雲室、梁川星巖（七言絶句）、絹桃女史、菊池五山（七言絶句）、谷文晁、亀田鵬斎（七言絶句）、山田芳洲、宮沢雲山（七言絶句）、淺野西湖、稻毛屋山（七言律詩）、五十嵐竹沙、木百年（七言絶句）、谷口月窓、斎藤天籟（館海庵、七言絶句）、春木南湖、津久井雨亭（七言絶句）、金子金陵、糸井榕斎（七言絶句）、桜井秋山、松浦篤所（七言絶句）、鏑木雲潭、館柳湾（七言絶句）、鈴形蕙斎、市河寛斎（七言絶句）、谷文一、巻菱湖（七言絶句）、谷舜英、海野蠖斎（七言絶句）、喜多武清、佐羽淡斎（七言絶句）、一部人物比定の不確かなものは、とりあえず揖斐高氏論文による。

未調査の部分が多く生没年は一部異説もあるが、改めて全体を掲げると、雲室（芝光明寺の僧で小不朽社を設立、一七五三～一八二七）、梁川星巖（山本北山門下で玉池吟社を設立、一七八九～一八五八）、絹桃女史（山本北山の妻、一七五六～一八三一）、菊池五山（『五山堂詩話』の著者、詩仏と並ぶ当時の代表的詩人、一七六九～一八四九）、谷文晁（江戸後期の代表的画家、一七六三～一八四〇）、亀田鵬斎（寛政異学の禁で民間儒者となり詩书画すべてをよくした、一七五二～一八二六）、山田芳洲、宮沢雲山（寛斎門下の漢詩人、一七八〇～一八五二）、淺野西湖（文政年間の人とされる）、稻毛屋山（？～一八二二、子の三千は恭斎とも言う）、五十嵐竹沙（南画家、一七七四～一八四四）、木百年（寛斎と如亭に学んだ漢詩人、一七六八～）、谷口月窓（一七七四～一八六五）、斎藤天籟（館海庵とも言い、妻とともに桐生に移り住んで翠屏吟社を設立、？～一八二七）、春木南湖（文晁と並び称された南画家、一七五九～一八三九）、津久井雨亭（桐生の医師、？～一八三一）、金子金陵（文晁門下、華山の師としても知られる、？～一八一七）、糸井榕斎（北山門下の儒者で秋田の人、一七八一～一八四二）、桜井秋山（雪保とも言う、？～一八二四）、松浦篤所（寛斎門下、一七八一～一八二三）、鏑木雲潭（一七八二～一八五二）、館柳湾（鵬斎門下の漢詩人、一七六二～一八四四）、鈴形蕙斎（北尾政美とも言い浮世絵風俗画も描く、一七六四～一八二四）、市河寛斎（一七四九～一八二〇）、谷文一（文晁の養子、一七八七～一八二八）、巻菱湖（幕末の代表的書家、一七七七～一八四三）、谷舜英（文晁の妹、一七七二～一八三二）、海野蠖斎（備中庭瀬藩家老で画家、一七四八～一八三三）、福田務廉（一七四四～一八一九）、酒井抱一（江戸琳派の代表的画家俳人、一七六一～一八二八）、

に、佐羽淡斎、福田紹廉、木百年、津久井雨亭、梁川星巖、宮沢雲山、大窪詩仏、松浦篤所、斎藤天籟、菊池五山、糸井榕斎、館柳湾、市河寛斎、稻毛屋山、海野蠖斎、巻菱湖、亀田鵬斎、と続き、その後に絵画は酒井抱一、山田芳洲、絹桃女史、春木南湖、浅野西湖、谷舜英、雲室、谷口月窓、桜井秋山、鏑木雲潭、鈴形蕙斎、谷文晁、谷文一、喜多武清、大西圭斎、金子金陵、五十嵐竹沙となつていて。また漢詩作品のフォーマットである扇面の墨線の細部の有無、抱一と絹桃の幹の表現などに相異が見られる。

東京都立中央図書館加賀文庫本では、増山雪斎の署名の下の二印の上の方が右に傾いている。また谷文晁、文一の印影は無い。逆に、稻毛屋山の子三千の「恭斎」印、津久井雨亭の印がある。また鉄形蕙斎、大窪詩仏、喜多武清などの作品では、署名と印影との位置関係が桐生市本と異なる。画面の点では、絹桃作品の左上の花のつばみが消失している部分があり、五十嵐竹沙作品の背景全面には淡墨が施され深みを与えており、抱一作品では刷りの具合で画面全体が眼くなっている。さらに海野蠖斎以後が、酒井抱一、大窪詩仏、喜多武清、福田務廉、佐羽淡斎、大西圭斎となつていて掲載順序を異にしている。

東北大学附属図書館狩野文庫本は、増山雪斎の題字のうち、「涙」と署名印の部分を欠失している点は伝来過程の問題であるが、大きく異なるのは、作品すべてを書画に二分し、以下の順序になつてている点である。竹翁の発句の後

大西圭齋（文晁門下、一七七三～一八二九）、大窪詩仏（詩聖堂と名乗り五山と並ぶ漢詩人、一七六七～一八三七²⁸）、喜多武清（文晁門下で浮世絵風俗画も描く、一七七六～一八五六）、佐羽淡齋（一七七一～一八二五）

若干の補足を加えると、鏑木雲潭は、市河寛齋の次男で、梅溪の養子となつた。木百年は、本姓三枝、名を寿、号は百年、小峰、愚庵など。信州中野近くの出身、市河寛齋や中野に晩晴吟社を設立した柏木如亭に学び、漢詩人として知られた。なお、この木百年を桐生の八木橋元恭とする説に少し触れておきた。確かに元恭には、木翁、百年の号があるが、先に述べた文化七年の箱根旅行の折に淡齋が建てた芦の湯碑の山本北山碑文に旅行の同行者として木百年の名があり、碑の漢詩の署名には「木寿 愚庵」とあるので、木百年を元恭とすることは無理であろう。

主な作家を生年順とすると、海野蠖齋（一七四八）、市河寛齋（一七四九）、龜田鵬齋（一七五二）、雲室（一七五三）、増山雪齋（一七五四）、春木南湖（一七五九）、酒井抱一（一七六一）、館柳湾（一七六二）、谷文晁（一七六三）、鍬形蕙齋（一七六四）、大窪詩仏（一七六七）、木百年（一七六八）、菊池五山（一七六九）、佐羽淡齋（一七七二）、五十嵐竹沙（一七七四）、喜多武清（一七七六）、巻菱湖（一七七七）、宮沢雲山（一七八〇）、鏑木雲潭（一七八二）、谷文一（一七八七）、梁川星巖（一七八九）となる。

参考まで没年順は、金子金陵（一八一七）、谷文一（一八一八）、増山雪齋（一八一九）、市河寛齋（一八二〇）、稻毛屋山（一八二二）、鍬形蕙齋（一八二四）、佐羽淡齋（一八二五）、龜田鵬齋（一八二六）、雲室（一八二七）、酒井抱一（一八二八）、津久井雨亭（一八三一）、海野蠖齋（一八三三）、大窪詩仏（一八三七）、春木南湖（一八三九）、谷文晁（一八四〇）、巻菱湖（一八四三）、館柳湾（一八四四）、五十嵐竹沙（一八四五）、菊池五山（一八四九）、鏑木雲潭（一八五二）、宮沢雲山（一八五三）、喜多武清（一八五六）、梁川星巖（一八五八）、谷口月窓（一八六五）となる。

以下未調査の人物は、津久井雨亭（生年）、木百年（没年）、斎藤天籟（生年）、稻毛屋山（生年）、山田芳洲、淺野西湖、桜井秋山（生年）、金子金陵（生年）である。

いずれも現在の掲載順序との関連性は見られない（ここでは同一年の場合の先後までは確認していない）。次章で取り上げる『清風集』の場合のように、ある程度の編集作業は当然考えられるが、依頼した原稿の到着順というのがほぼ現実に近いのだろうか。なお、本書には跋文や奥付は見られない。なお、漢詩その他の作品は一部不確かだが、下記のとおりである。

梁川星巖（七言絶句）雨愁風憎特地残 惆悵春光挽住難 却抱愁衾眠三日 芳魂入夢果珊々、菊池五山（七言絶句）山葩豈可久塵寰 帝遺靈師急召還 一夜芳魂帰玉府 空濛烟雨暗人間、龜田鵬齋（七言絶句）桜花着雨總妖媚 宛似驪姫初泣顏 只怕芳姿這裏損 量紅濕尽殘深間、宮沢雲山（七言絶句）烟雨無端斷送春 花寒香冷欲成塵 今朝零落有誰訪 怡似人間失意人、稻毛屋山（七言律詩）七日花齡真可惜 開來況復值春霖 風微柔質雖無恙 露重治容將不禁
冷艷帶愁慵媚態 淡桜濺淚惱芳心 看々裏却瀟々裏 一段愁情添得深、木百年（七言絶句）殘紅樹底綠芽繁 懊微吟魂不出門 蜂懶蝶慵人寂寞 半簾疎雨易黃昏、斎藤天籟（館海庵、七言絶句）風雨漫天昏未收 遅櫻解散付東流 傷心不只詩人耳 燕語鶯聲總結愁、津久井雨亭（七言絶句）昨看庭桜爛漫開 今朝一食碎為埃 如何半夜始花雨 滴損十分顏色來、糸井榕齋（七言絶句）春老山村雨又風 桜花定減幾分紅 看來詩眠欲迷處 一抹輕煙淡淡中、松浦篤所（七言絶句）風雨無情傷損春 桜花万点委泥塵 何方返得芳魂住 為慰炷香簾裏人、館柳湾（七言絶句）一曲歌悲值洗紅 花啼偏情雪肌融 惜芳何處堪腸斷 最不勝情是雨中、市河寛齋（七言絶句）誘雨春風着意吹 坐愁玉樹損芳姿 繡屏錦障無謀用 只道天公亦有私、巻菱湖（七言絶句）芳草池塘帶欲迷 花飛万点已成泥 幽窓三日空濛裏 只有流鶯盡意啼、海野蠖齋（七言絶句）一種芳根誰競艷 瓊葩迎暖十分開 無情最是今朝雨 疲損華容幾許來、福田務廉（和歌）惜しめどもとまらぬ花のなごりゆえ降るはなみだの雨にやあるらん、酒井抱一（五字二行）霧雨不成点 映空極有無、大窪詩仏（七言絶句）顛風狂雨最無情 碎尽庭前一樹桜 中有愁人眠不着 孤燈挑得坐残更、佐羽淡齋（七言絶句）人間無術護殘紅 蝶恨蜂愁漣作空 香夢驚醒難復寢 一簾狂雨五更風

文化文政期の漢詩隆盛に江湖詩社が果たした大きな役割については、すでに諸氏により説かれている。揖斐高氏によれば、『五山堂詩話』収録詩人のベスト・テンは著者編者の菊池五山をトップに、以下柏木如亭、大窪詩仙、市河寛斎、佐羽淡斎、市河米庵、頬山陽、宮沢雲山、日根野鏡水、館柳湾となる。上位四人はすべて江湖詩社の詩人で、「この『五山堂詩話』そのものが、当代詩壇の革新的前衛であつた江湖詩社の詩風・詩論を広めるための広報宣伝誌的な役割を担う、いわば機関誌的な存在でもあつた」ということである。ベスト・テンに続く人たちの中には梁川星巖や木百年もすぐ登場する。こうした中で専業詩人ではない佐羽淡斎が第五位に挙げられているのは、やや奇異にも感じられるが、それは単に五山の恣意的な収録ということではなさそうに思われる。

池澤一郎氏もまた、近年の著書²⁹において、九十五首の漢詩を取り上げる中で淡斎詩を十九首収録し、作品鑑賞をされている。これらは収録詩数全体の約20%を占めており、その比率は決して小さくはない。これらを見ると、近世後期の漢詩史における淡斎詩の実質的評価が改めて必要なことを示していると考えられる。本業の経営維持と文芸創作の両立が、淡斎という一個人の内面において、どのようになされたかも問われるべきだろう。なお、江湖詩社の詩人が中心とはいっても、館柳湾が南宋よりもむしろ晚唐の詩風を重んじたり、梁川星巖などは清朝の詩風を取り入れるなどの点も無視できないだろう。³⁰

『花濺涙帖』の絵画作品はすべて水墨淡彩であるが、控えめな中に洗練された色彩や水墨画の筆致を木版でみごとに表現している。印象に残る数点を挙げると、風景の一角を巧みに切り取った雲室、花木図譜にやや近い舜英や細桃女史や秋山、さっぱりした水墨風の文晁、北斎の瀧廻り連作を思わせる南湖、細部のタッチは緻密でありながら全体に余白を意識した水墨山水の竹沙、風景を大きくとらえた名所絵風の雲潭、伊藤若冲のいわゆる拓版画を思わせる背景全面を墨で埋め、前景に桜の枝を浮き出させる趣向の抱一、構図や枝葉に軽妙さを見せる蕙斎や武清などの作品である。画系の上では、当然ながら谷文晁の周辺が多くなっている。詩人の方は、寛斎、北山、鵬斎と関連するのが大半である。³¹

本書は、市河寛斎の序文を除けば、詩画の作品集という形をとり、成立背景

等の情報には乏しいが、以下で取り上げる『清風集』は序跋と漢詩に添えられた文章が成立状況をよく物語ついている。

三 『清風集』に見える画家詩人たち

『清風集』は、武州本庄（埼玉県本庄市）の医師で漢詩をよくした神岡得一が自宅竹嶼医屋を建てた折の記念に文人諸家から寄せられた詩文書画を集めて、天保九年（一八三八）二月に刊行されたものと考えられる。本書の書名は、跋文の後に谷文晁と春木南湖の「清風」の題字があり、かつ見返し扉に「得一先生著 清風集 宜雨亭藏」と三行に記されることによる。内題に清風集初編とあるが、おそらく続刊はなされていない。本稿においては、漢詩その他の作品鑑賞や批評を目的とはしないので、すべて省略する。全文は『本庄市史』資料編を参照願いたい。

神岡得一（一七九七～一八八三）は、号竹嶼、医者としては代々玄俊と称した。文政八年以降に本庄に定住、大窪詩仙に師事して漢詩をよくしたが、本業に関する著作も数種ある。また文人趣味の著作も数種あるようだが、いずれも未見である。なお当然ながら、『清風集』において彼の竹への愛好が繰り返し語られるが、それも彼が初めてというわけではない。竹はすでに四君子の一つとして中国文人の執着する対象となつて久しい。さらに神岡得一のごく近くにも先行者がいる。それは彼とほぼ同年齢の金井鳥洲の父である万戸（一七七〇～一八三二）である。彼は、佐羽淡斎と全くの同世代で、華竹庵と称して俳諧に親しみ、自宅の屋敷内に抱一の句碑も建てている。万戸の家と本庄とは目と鼻の至近距離にあるので、親子二代にわたつて日頃の交流があつたに違いない。序文は、武州忍藩の客儒芳川波山（一七九四～一八四六）によるもの。波山は、山本北山に学び、文政九年に林述斎の推薦で忍藩の儒者（客儒）となり、進修館を設立して指導にあたつた。³²

序

竹之為物也、非草非木、虛心直竿、翠光消暑、碧色凌寒、可謂清操有恒者矣、医之於人也、非土非農、天心儒術、業濟世民、功饒良相、此非不恒其德者之所能為也、神岡得一武之本庄之人也、指頭陽春、博施回生之恩、胸中之風月、旁耽文墨之技、從江山翁、聞詩學書、翁嘗以竹嶼命其堂、蓋有所寓意也、逸以詩相識、而欠面晤、乃寄題以蕪調、而藻雅之士、投詩者不少矣、頃者、貞以為冊子、題曰清風集、令之為医者、懦而委靡不振、則必頑而貪昧無恥、觀是集者、猶坐竹陰對清風、當自興起其心矣、逸故術医之与竹同德有恒之義、以祝翁之意之所寓、置其卷首、

波山處士逸書於舍香草堂

竹窓之下（印）（印）

四君子の一つである竹の特徴と性格、神岡得一が本業とする医術の社会的役割、文人趣味のあらわれとしての漢詩人の姿、そして漢詩も医術と同等の意義を持つことを主張している。なお、向島百花園内にある文政五年（一八二二）の大窪詩仙の画竹碑冒頭にも「竹之為物非草非木」云々と見える。

次に高久靄厓と菅井梅閔の作品が掲載される。

画中の文字は「竹嶼医屋 丁酉初冬為得一詞兄博粲 疎林外史徵（印）（印）」³⁴ 疏林外史は高久靄厓（一七九六～一八四三）の画号である。丁酉は天保八年（一八三七）で、栃木県立美術館での高久靄厓展カタログ所載年譜に、天保八年九月二十六日本庄遊歴とあり、典拠として人見伝藏氏の『高久靄厓伝』を挙げる。³⁵ 人見伝藏氏は著書の後記で、文政五、十一年の北越遊歴と天保八年の上州、本庄方面への足跡は、いずれも口碑のみで文献の裏付けがないとし、特に後者については本文で全く触れられていない。靄厓が実際に本庄を訪れて本作品を制作したかどうかはわからない。

本庄安養院の渡辺紅於の墓石に刻まれた四君子のうち靄厓の菊図には「己亥秋七月写於山房」とある。靄厓には晚成山房の号があるが、この菊図の山房は渡辺紅於の小倉山房のことと一応解釈しておきたい。³⁶ 己亥は天保十年（一八三九）で、この年五月には「蟻社の獄」で渡辺華山らが捕らえられている。

本作品について、『本庄市史』資料編での解題者は「河辺崖上の医屋はやや真に近いが、後にそびえる山は本庄の景色に似ない」と述べていて、竹嶼医屋の有様は似ていると言えば確かにそのように見えようが、実際の風景に特にこだわる必要はない。よく知られた谷文晁の寛政八年（一七九六）作の蒹葭堂図³⁷ のように理想的な書斎図なのであって、かつ中国から日本へと受け継がれた室町時代の詩画軸以来の文人書斎図の伝統を引きずっている。実際の本庄の地形については、この『清風集』自体の中で何人かの詩人が述べている。

梅閔作品に画中の文字は無く「梅閔（印）（印）」とあるのみ、竹林散策図は仮題である。

菅井梅閔（一七八四～一八四四³⁸）の本図と図様が大変よく似た竹林秋景図が仙台市博物館に所蔵されている。残念ながら年記がないので制作年は不明である。

梅閔と本庄の縁は深く、梅閔没後の翌年弘化二年（一八四五）には渡辺紅於三人兄弟の主催により本庄安養院で追福記念書画展観が行われている。協力者として、高隆古、椿椿山、安西雲煙、谷文一、金井鳥洲らとともに神岡得一も名を連ねている。³⁹

次に「露氣逼人 椎字」の大字の墨書があり、その後に「稼圃」の文字と墨竹の枝が掲げられ、「波山先生嘗遊瓊浦得是画万里袖之而歸予有竹癖割愛惠賜今模写其一枝以表其恩光 舜誌」という神岡得一による注記がある。芳川波山が、瓊浦すなわち長崎で得た江稼圃の竹図を土産に持ち帰ったことを記す。江稼圃は、清代の画家、浙江省臨安の生まれ、名は泰交、字は連山、江大来とも称した。文化元年（一八〇四）に来舶したとされ、以後数回来日している。菅井梅閔、鉄翁祖門、木下逸雲ら日本人作家が師事、江戸後期の南画に大きな影響を与えた。黄公望風の山水画を得意とした。嘉慶二十年（一八一五）には存命、青木木米が五十六歳の文政五年（一八二二）に長崎で会つたともいわれる。没年不明。山水画にとどまらず、四君子のような主題においても日本の作家に影響を与えたことが予想される。

國家奎運之隆雖寒鄉僻邑絃誦之声洋洋盈耳吾得一先生濟世余暇以詩自娛天資愛

竹騒人吟客寄題之詩甚多矣而其詩皆書于寸縞尺楮不能無遺失之患此先生之所以有此挙也先生既使友人小劔書詩仏老人所寄題詩鐫石以立之於中庭老人聞碑之成大書万條寒玉四字以見贈焉蓋謝其厚意也先生不獨厚於老人今又刻之以伝於世則此厚於諸君子也此集不序爵位年齒者從獲詩之前後耳書之以換例言云天保九年戊戌春二月門人児玉郡医生菅玄達拜識

天保九年、神岡得一の門下生菅玄達により神岡得一の漢詩愛好、詩仏の題詩による詩碑などのことが記され、とりわけ『清風集』が漢詩の寄せられた順序に沿つて編集されたとあるのが興味深い。

次に内題があり、以下順次各人の詩文が掲載される。

清風集初編

東武 神岡彝民則 編輯
男 則又輔 校字

以下掲載順に列記する。各人物の肩書き出身等は原文のままである。

鳥山老侯（七言絶句）、大窪詩仏（佐竹藩儒官、七言絶句）、山田三岳（忍藩大夫、七言絶句）、山田桃蹊（忍藩大夫、七言絶句）、山本綠陰（幕府世臣、七言絶句）、椎名秋村（上毛人、七言律詩）、渡辺紅於（武州人、五言絶句）、内野爾堂（武州人、七言絶句）、宮澤雲山（武州人、七言絶句）、藤井月坡（忍藩士、七言絶句）、布施田霞村（武州人、七言絶句）、依田竹谷（幕府世臣、五言絶句）、谷文二（江戸人、七言絶句）、実庵（周防人、七言絶句）、大槻盤溪（仙台儒官、七言絶句）、戸谷梅花（武州人、七言絶句）、岸田米山（忍藩侍医、七言絶句）、林谷（江戸人、五言絶句）、渡辺東里（長州人、五言律詩）、川田保脩（久留里藩士、五言絶句）、金井烏洲⁴⁰（上毛人、五言律詩、五言絶句）、武政南廬（武州人、五言絶句）、糸櫻窓（高崎威徳寺住、七言絶句）、関根琴陵（武州人、七言絶句）、竹内逸（上毛人、七言絶句）、寺崎梅坡（忍藩士、七言絶句）、細川劫庵（武州人、七言絶句）、豊澤（南部人、七言絶句）、石澤復軒（上毛人、七言絶句）、馬場若水（高崎藩士、七言絶句）、菊池五山（讃岐人、五言絶句）、岩田晴潭（江戸人、七言絶句）、立原杏所（水府士、五言律詩）、金子勉廬（芸藩儒臣、七言絶句）、生田

綠堂（忍藩士、七言絶句）、津久井文讓（上毛人、五言律詩）、鈴木竹翁（常陸人、七言絶句）、河津省庵（忍城客医、七言絶句）、大島觀水（忍城人、七言絶句）、千田芸斎（武州人、五言絶句）、原田曠湖（近江人、七言絶句）、松原謙藏（上毛人、七言律詩）、矢口健斎（江戸人、七言絶句）、田村赤山（上毛人、七言絶句）、池田淡斎（信陽人、七言絶句）、岡田小簾（伊勢崎藩儒官、五言律詩と文章か）、安積良斎（陸奥人、七言律詩）、大谷尚古（上毛人、七言絶句）、岩田秩干（武州人、七言絶句）、小室笠山（武州人、七言絶句）、長谷川霞水（常陸人、七言絶句）、森田玉坪（武州人、七言律詩）、芳川波山（忍城客儒、七言絶句）、荒木鄰霞（武州人、七言絶句）

五言絶句が九首、七言絶句が三十九首、五言律詩が五首、七言律詩が四首となり、圧倒的に七言絶句が多いことがわかる。所収の画家詩人俳人を出身別に見ると、武州が三十八人（その約半分が地元本庄、そのまた半分が忍藩関係者）、上州が十二人、江戸が十五人、その他の地域が十五人で計八十人となる。ただしここでは出身を厳密に生地とせず、天保九年時点での居住地によつている。たとえば立原杏所や高久靄崖は江戸で数えている。

冒頭の鳥山老侯は、『五山堂詩話』巻十に見える大久保忠成であろうか。上州人については、本多夏彥氏の調査により概略がわかる。⁴¹ その要点のみを記せば、椎名秋村は頼山陽に学んで詩を得意とした。樅窓は寺門晴軒に学び詩文にすぐれた。馬場若水は詩および蘭竹画にすぐれた。深尾蓼水は詩書画をよくした。津久井文讓は前橋の医師で詩をよくした。その他の人物については不明とされる。

なお武州忍藩の文芸愛好を示す一例として、松平清方（号泰翁）、清昭（号松坡）、清貫（号蘭室）がそれぞれ漢詩三百首ずつ『五山堂詩話』に掲載されていることが挙げられる。

家嚴臥蓐旬余諸治無驗因請得一先生之一診輒得全愈予家有朱竹一盆勁幹深紅如珊瑚蓋奇種也予知先生有愛竹癖遂割愛以為謝係以蕪詩一絕

渡辺紅於（一八一四—一八八三⁴²）は、元小倉氏で、本庄の旅籠屋の紅葉屋に養子となつた新兵衛の次男。男子三人兄弟で、長男が紅葉屋を継ぎ、次男は分

家して利根川を望む崖上に広大な屋敷を構え、小倉山房と名付けて多くの文人墨客と交流した。先代から文人趣味があつたが、父の号である活裁は菅井梅閑により名付けられたという。紅於の号は、中国唐時代の詩人杜牧の著名な作品「山行」からとつてゐる。すなわち「遠上寒山石径斜 白雲生處有人家 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花」の中からで、屋号紅葉屋と相通ずる。

竹嶼国手求其書院之詩因賦竹以呈時丙申中夏竹醉後一日也

内野爾堂 武州人

これにより、天保七年（一八三六）に神岡得一から漢詩制作を依頼されたことがわかる。

波山先生教余作寄題竹嶼医屋之詩余嘗聞其名而未知其人矣世俗呼医枝拙陋者為蔽医蓋數字倭譯近庸音故訛称庸医耳且邦俗謂竹之叢生者為蔽故医家惡蔽医之名而種竹於門庭者少況名其屋者乎独竹嶼主人飄然脫俗習以竹名其屋此其胸中之洒落可想而知也因賦小詩以博一噱

岸田米山 忍藩侍医

俗に竹蔽と言ひ、蔽医者と言う。その語感の悪さを問題とせず、竹嶼主人は俗塵を去つた文人の境地にいることを称賛する。

菊池五山の五言律詩「題墨竹為竹嶼主人」の後には、

社友得一君天資風流愛竹自号竹嶼予嘗写墨竹戲贋署詩仏老人字以贈焉君觀之乃寄書曰處惠画竹頗佳視之詩仏先生處写自乏風神一言撤吾膏肓其心眼明察不容人欺如此予於是益信君診脈除疾亦如觀是画竹呈以一絕

岩田晴潭 江戸人

詩仏が墨竹画に巧みであつたことにより、戯れにいたずらに自分で描いた墨竹画に詩仏の署名を添えて神岡得一に見せると、直ちにそれを見破つたというエピソードを語る。

同并序

岡田小篠 伊勢崎藩儒官

本庄医隱神岡君傍水栽竹自称竹嶼医屋以予之愛竹其題詠之詩予無邂逅之識然声應氣求終不以可止焉惟嶼者海中洲上石山也非陸地之名也而君取之者蓋有故矣本庄中山之官道行人馬蹄絡繹四集故其心若居島嶼之絕境飄然獨立夐出塵表然後愛竹之情可以全焉陶予曰心遠地自偏此惟要心遠而已若夫逢迎世俗名利是務則處愛之竹焉知能無其恥乎不知主人以為如何試書其說且贈之以詩

ここでは、嶼が海中の島であることを言い、本庄は中山道の宿場町として賑わうが、あたかも絶海の孤島におけるように神岡得一は俗塵を去つて飄然と文人の境地に遊んでいると語る。

同并序

森田玉坪 武州人

秉與主人以詩相識也旧矣邇來文人墨客諷詠其園池之佳趣以寄題者甚多矣予亦贈以八句之詩今也諸君先我着鞭者何邪如秉者処謂在江湖而忘水者也然吟盟膠漆之久騒壇風月之会贈答不廢別有秉彝唱和集

渡辺東里 長州人

神岡得一の文人墨客との交流ぶりと一著作について記している。

ここでは、直接の面識の無い詩人が酒のついでにたまたま見た神岡得一への林谷の漢詩作品に刺激されて自分も一詩を贈つたことが記されている。

彝少年薄倖遊蕩花街既而乞治者戶屢常盈因倣董仙療一病則植以一竹歲月之久森然成林遂構亭於其間扁曰竹嶼医屋風幹煙梢鳳鳴鸞舞晨夕對之於是揚州之夢一覺実此君之德非医人乎亭成之日縉紳君子風騷才子皆賜以詩滿筐金玉鏘然可聞乃輯成一小冊子予彝亦賦古調一詩以附于卷尾實里婦効顰之為爾

珍しく神岡得一の青年期の遊蕩を語り、やがて本業の医術において一度治療に当たることに一本竹を植えるという風流才子ぶりを述べている。

跋

昔者天台裴子目英絕堂竹里竹塢幽居之称其後寓京師尚不指其故称且求能言在之寄題而不已或者訝其居之無竹裴子曰有竹之竹不如無竹之竹之義也有竹之竹適在耳目無竹之竹適在心具載於宋太史集中吾友神岡得一君性愛竹其旧居有渭川之富今僑居於予本庄駅園庭隘窄無竹之可以植然揭竹嶼医屋之額蓋其胸中之竹無時而不存也嗟乎何与裴子相似之甚然而有竹之竹有音能鳴無竹之竹不能鳴其音則不得假能言之人而不鳴之也此所以有清風集之擧也讀是集者其必知得一之瀟洒同於竹狀詩筆亦同於竹音矣乎

玉坪耕吏森田秉選（印）

弟
蕉齋書（印）

跋文は、有竹の竹、無竹の竹、胸中の竹とやや難解な字句を並べていてわかれにいくが、神岡得一の瀟洒な一面を称えて締めくくっている。

次に「清風 為得一国手 文晁」「清風 南湖」という文晁、南湖の題字がある。⁴³

文晁と南湖は、南画の世界では前世紀の大雅と無村ほどではないにしても、当時の関東での一大画家のように見なされているのが、著名文人番付等によつてうかがえる。

最後に付録のような形で、和歌（狂歌）俳句等が収録されている。

三十一言十七字之國風同於彼土之五七言絕句至其感人高有勝於詩者故非風藻博雅之人則又何能之乎今折所寄題者二十余首附之於卷末亦足以觀披此諷詠之寄矣

「三十一言十七字之國風」は、和歌狂歌俳句等を意味する。

四 まとめにかえて

最後に、文化文政期から天保にかけての関東画壇の動向の一端について簡単に触れよう。すなわち文化九年（一八一二）の『花濱涙帖』から天保九年（一八三八）の『清風集』への四半世紀の変化の特徴について考えてみよう。

第一に、著名画家詩人の相次ぐ死去である。亀田鵬齋や酒井抱一ら文化文政期を代表する人物が一八二〇年代に世を去り、一時代の終わりを暗示するが、一八三〇年代に入ると、南湖（一八三九）、文晁（一八四〇）、杏所（同）、華山（一八四一）、靄崖（一八四三）、梅閔（一八四四）と続き、少し間をおいて椿山（一八五四）、武清（一八五六）が死去する。『清風集』に題字を寄せた文晁と南湖は文字通り最晩年で、詩仏は作品が収録されてはいるものの出版前年に亡くなっている。第二に、漢詩人口の裾野がさらに大きく広がり、それが明治以降に継続されていくことがわかる。第三に、靄崖、梅閔、烏洲などは、文晁以降の関東画家の中で、華山や杏所と比べると、それぞれ真景図を描くこという点は共通に見られるが、全般的に洋風表現には関心を示さず旧来の南宗画にこだわる保守的傾向が大きい。誰その作品に基づくといふいわゆる「倣」の形式や形態にこだわり、作品の生命力が乏しくなっていく。粉本主義の弊害が、かつて狩野派について言わたが、南画においても全く同様のことが言える。総じて、中国明清絵画の形式的な受容および関西と長崎への遊歴がこれらの方には共通して見られる。靄崖は一年三ヶ月、烏洲は約一年、梅閔に至っては約二十年、これは遊学というよりほとんど放浪に近い。そうした先駆的なパターンは、すでに柏木如亭に典型的に現れている。

ともあれ、日本近世南画史の締めくくりである江戸時代後期の様相をうかがう上で、ここに紹介した二つの詩画集は大変興味深い内容を示していると言えよう。

本稿をまとめにあたり、資料の特別閲覧については東京都立中央図書館、東北大学附属図書館、桐生市立図書館、本庄市立図書館の各館および日頃利用する公立図書館、大学附属図書館職員の方々、また資料調査の一部と図版掲載については桐生市立図書館の大瀬祐太館長および群馬県立近代美術館学芸員の鶴見香織さんにお世話になりました。深く感謝申し上げます。

付記

群馬県立近代美術館で「江戸と桐生 華やかなりし文人交流展」が、二〇〇五年十一月十九日～十二月十八日の会期で開催され、参考作品を含めて計三十三点が展示される。残念ながら、本稿提出までにその成果は盛り込めないので、追って参考としたい。

註

- 1 「本庄市史」資料編 一九七六年
- 2 中野三敏『江戸名物評判記案内』岩波新書 一九八五年、そのほか同氏の『江戸文化評判記』中公新書 一九九二年、「十八世紀の江戸文芸」岩波書店 一九九九年
- 3 賴惟勤『日本思想大系37 道徳学派』岩波書店 一九七二年、日野龍夫『道徳学派』筑摩書房 一九七五年、同『江戸人とユートピア』朝日選書 一九七七年、揖斐高『江戸詩歌論』汲古書院 一九九八年
- 4 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』『五山堂詩話』の世界』角川書店 二〇〇一年
- 5 註2文献参照
- 6 高橋博巳『京都芸苑のネットワーク』ペリカン社 一九八八年、田中優子『江戸はネットワーク』平凡社 一九九三年、文晁・鵬斎・抱一の親密な交流については、相見香雨『文晁模写の東坡像に就て』絵画叢誌 一九六六年五月号、渥美国泰『亀田鵬斎と江戸化政期の文人達』芸術新聞社 一九九五年（同氏には谷文晁・鍬形蕙斎ほかに関する著書もある）、瀬木慎一『江戸明治・大正・昭和の美術番付集成』里文出版 二〇〇〇年
- 7 揖斐高『化政期詩人の地方と中央―佐羽淡斎を中心』文学 一九七八年六月号、『江戸詩歌論』汲古書院 所収 一九九八年
- 8 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』麦書房 一九六六年、同『江戸後期の詩と宋詩』文学 一九七八年六月号、中村真一郎『頼山陽とその時代』中央公論社 一九七一年ほか。
- 9 『桐生市史』中巻 第四章第六節第三項 一九五九年、註4文献参照
- 10 揖斐高『遊人の抒情』岩波書店 二〇〇〇年、同『新日本古典文学大系64』〔如亭山人遺稿〕岩波書店 一九九七年、入谷仙介『柏木如亭』日本漢詩人選集第八卷 研文出版 一九九九年
- 11 徳田武『江戸漢詩選I 文人』岩波書店 一九九六年
- 12 浅野梅堂『寒繁璣綴』風俗絵巻図画刊行会 芸苑叢書第一期 一九一八年
- 13 桐生織物史 上中下巻 桐生織物史編纂会編 一九三五・四〇年、『桐生織物史人物伝』佐羽淡斎翁遺績顕彰展覧会彙報 桐生市図書館 一九三九年、『桐生市史』中巻 第四章第六節第三項 一九五九年、『国史大辞典』「佐羽吉右衛門」、『国書人名辞典』第2巻「佐羽淡斎」
- 14 また当時の地方の書画会の様子を伝えるものとして、渡辺華山『毛武遊記』天保二年（一八三二）渡辺華山集第一二巻 日本書センター 所収 一九九九年、拙稿『渡辺華山の毛武旅行』利根川流域の自然と文化』関東地区博物館協会 所収 一九八三年
- 15 拙稿『江戸時代後期の文芸・絵画と桐生』講演会資料 桐生市中央公民館 二〇〇三年 井田太郎「富士筑波という型の成立と展開」国華一三一五号 二〇〇五年、日本美術史におけるパトロンの定義と具体的な検証という大きな問題にはここでは触れられない。佐羽淡斎ほか何人かの関東信越地方のパトロンの人物と江戸絵画との関わりについては、具体的な作品を挙げて別稿を用意したい。
- 16 小川環樹『時に感じて花は涙をそぞぐ』吉川幸次郎全集第十一巻月報 一九六八年、『小川環樹著作集』第二巻 筑摩書房 所収 一九九七年
- 17 森銘三『落葉籠』日本古書通信 一九五五～一九六六年連載 『森銘三著作集』統編第十一巻 所収 一九九四年 『国書総目録』のウの部では、『雨桜帖』の注記に、『佐藤溪斎追悼詩画帖』とある。これは、「佐羽淡斎追悼詩画帖」の誤でなくてはならない。日比谷図書館加賀文庫の一本が挙げてあるのに過ぎないのを見ると、この書は伝本は少いのであろう。』とある。正確には淡斎は追悼の主催者である。『国書総目録』の一九八九年補訂版においては「佐羽竹翁追悼詩画帖」と訂正されている。なお、『国書総目録』では「花濱涙帖」を別個に挙げ、「絵画、雲室・文晁等画、佐羽淡斎編、文化九刊、東北大狩野、村野」とある。
- 18 小林忠『櫻華藪』作品解説『江戸名作画帖全集』第七巻 円山四条派ほか 所収 駿々堂出版 一九九六年、この画帖の「いりあひさくら」の中に一点桜の散る姿が描かれている。それに対して『花濱涙帖』では、まさに散る（竹翁の死去）ことに意味があるので、その様々な姿が描き出されている。
- 19 栗田豊三郎「佐羽竹翁追悼集『惜花帖』に就て」桐生史苑二十五号 一九八六年、漢詩出版 一九九二年)、揖斐高『市河寛斎・大窪詩伝』江戸詩人選集第五巻 岩波書店 一九三九年 三巻七号～五巻八号 (復刻本 あかぎ一九九〇年)
- 20 市河三陽『市河寛斎先生』書苑 一九四三年 『森銘三著作集』第十巻
- 21 森銘三『柏木如亭の『聯珠詩格訳註』』書苑 一九四三年 『森銘三著作集』第十五巻 所収 中央公論社 一九七四年
- 22 国書人名辞典第二巻「佐羽竹翁」、武田光一『光琳百図』出版の周辺「抱一と文晁の交友」琳派一版と型の展開 所収 町田市立国際版画美術館 一九九二年、同「書画が蒐

まる／書画を蒐める—寄合・蒐集書画帖について」『江戸名作画帖全集』第十卷文人諸

家 所収 駿々堂出版 一九九七年、その註1で、「佐羽淡斎が兄の竹斎の追薦のために」

とあるのは誤植か校正ミスと思われ、竹翁が正しい。なお、揖斐高氏も註4の著書で、「淡

斎の長兄で佐羽本家の当主だった佐羽竹渓が文化九年に歿した時には、竹渓が歿する前日

に書いたという遺筆の「ねごころを雨の桜に悩みけり」の句に因んで、江戸の詩人・文人

たち三十余名に桜を題にした詩・書・画を求め、それらをすべて扇面仕立てで模刻すると

いう、豪華な色刷りの追悼詩画帖『惜花帖』を出版した。』と書かれているが、これも竹

渓は竹翁でなければならない。

23 金井烏洲『無声詩話』(嘉永六年(一八五三)執筆、安政二年(一八五五)刊行、明治三年の

和綴本、日本画論大觀上巻 アルス 一九二七年、日本絵画論大系等に所収) 「詩人不画、

画人不詩、風雅中遺憾也、雲室道人嘆之、嘗唱小不朽社、當時訂盟者、桐君蘭石、平梅溪、

源台山、辺赤水等、輪流為主、盛作詩画之会、新參繼之者、西圭斎、野西湖、柏如亭諸人也、

余弱冠歎此会、略記其益簪之盛事。』

24 同じく『無声詩話』に「五山翁者余有声誉師也、嘗論楊誠齋詩曰、誠齋胸中別有一冶爐、

金銀鉛錫皆鎔而出之、余於画亦云。」とある。

25 抽稿『亀田鵬斎』『上毛書家列伝』下 所収 みやま文庫 一九八四年、杉村英治『亀

田鵬斎』三樹書房 一九八五年、同『亀田鵬斎の世界』三樹書房 一九八五年

26 森銑三『如亭と百年』書苑 昭和十八年二・三月号 『森銑三著作集』第四巻 所収

一九七一年

27 徳田武『野村篁園・館柳湾』江戸詩人選集第七巻 岩波書店 一九九〇年、鈴木瑞枝『館

柳湾』日本漢詩人選集十三 研文出版 一九九九年

28 揖斐高『大窪詩伝年譜稿』一国文白百合九号 一九七八年、同『国文白百合十号』

一九七九年、同『六成蹊國文十三・十六号』一九七九・八二年、『江戸詩歌論』汲古書

院 所収 一九九八年

29 池澤一郎『江戸時代田園漢詩選』農山漁村文化協会 二〇〇一年

30 中村幸彦『幕末の田園詩』文学 一九七八年六月号、水田紀久『幕末期の和刻と作詩文』

文学四十六巻六号 一九七八年 『日本近世漢文学史論考』所収 汲古書院 一九八七年

31 宮崎修多『河内三石亭集書画帖』国文学研究資料館報第二十九号 一九八七年、文化二

年(一八〇五)成立のこの書画帖には、関東系の画家詩人として、大窪詩伝、谷文晁、谷舜英、

喜多武清、菊池五山、春木南湖、諸葛監、立原翠軒、宋紫石、宋紫山、市河米庵などの名

があり、今回取り上げた二件の書画集と重複する人物が多い。あわせて、次の文献も参照

されたい。水田紀久『三石亭集書画帖所載兼葭堂來翰』二通 混沌第七号 一九八一年『近

世浪華學藝史談』所収 中尾松泉堂書店 一九八六年。

32 『本庄市史』通史編II 一九八九年、しの木弘明『画家金井烏洲の本庄宿神岡玄俊宛書簡』

本庄市史拾遺第二十一号 一九八七年、同『伊勢崎市明善堂文庫の神岡玄俊宛書簡』本庄

市史拾遺第二十二号 一九八七年、同『神岡玄俊旧藏書状卷』本庄市史拾遺第二十七号 一九九〇年

執筆者

山田 烈

芸術学部 美術史・文化財保存修復学科 非常勤講師

YAMADA Isao School of Art/Department of Art History and Conservation Part-time Lecturer

33 『新編埼玉県史』資料編十二 近世三 文化 芳川波山「晚晴樓文草」一九八二年、新

編埼玉県史』通史編四 近世二 第六章 一九八九年

34 高久靄崖展カタログ 柏木県立美術館 一九七五年、上野憲示「関東南画と靄崖」同展

カタログ所収 柏木県立美術館 一九七五年

35 人見伝蔵『高久靄崖伝』下野新聞社 一九六七年

36 抽稿『日本画調査第二回 清風集と小倉家碑群』群馬の森美術館ニュース第十号所収

群馬県立近代美術館 一九七七年、吉田敬一「本庄宿小倉家文人碑群」本庄市立歴史民俗

資料館紀要第三号 一九九二年、渡辺紅於関連の碑四十一件について、詳細に保存状況を記録したものである。ただし、個々の画家や詩人の作品内容とその成立背景については触れられていない。

37 水田紀久「谷文晁筆『兼葭堂図』私見」国華九九一号 一九七六年

38 『孤高の画人菅井梅閔』仙台市博物館 一九九四年、梅閔については、濱田直嗣「菅井

梅閔—略伝とその資料—」仙台市博物館年報第二号 一九七五年、同「菅井梅閔・人と芸術—孤高の絵師の残したもの—」『孤高の画人菅井梅閔』仙台市博物館 所収 一九九四年、内山淳一「仙台画壇の黎明期—寛政・文化期の画譜と書画会を中心に—」仙台市博物館調査研究報告二二十四号 二〇〇四年

39 柴崎起三雄「渡辺紅於催『菅井梅閔追福雅会』福島柳圃催『書画詩俳諧挿華会』について」本庄市史拾遺第十八、十九号 一九七七年、「菅井梅閔追福書画会」案内の全文は次のとおり。「三月十五日於本莊駅安養院梅閔先生追福相當申候、当日不論晴雨貴臨是祈、翌日よ利於同院古今書画展観之会相催候、好古之諸君子其珍幅奇軸御携惠然御来參被下度奉希候頓首」

40 しの木弘明「上毛文芸小考」群馬文化一二六号 一九七一年、同『金井烏洲』群馬県文化事業振興会 一九七六年、拙稿「文人画家金井烏洲」萌春二九〇号 一九八〇年、同

41 金井烏洲筆秋山清爽図—嘉永六年の日光滞在—群馬県立歴史博物館調査研究報告書第七号 一九九六年

42 本多夏彦「清風集中の上毛人」上毛及上毛人 一九三二年五月号

43 金井烏洲『無声詩話』では、烏洲の師南湖に六行、特に師事したとは書いていない文晁に五行当てていて。なお梅閔については早世した兄莎邨との交友以来の縁があり、記事内容は具体的で最も詳しく十八行もある(『日本絵画論大系』本による)。



同「涙」及び款記



増山雪斎書「花濺」



市河寛齋序文（市河米庵書）



市河寛齋序文（市河米庵書）



雲室



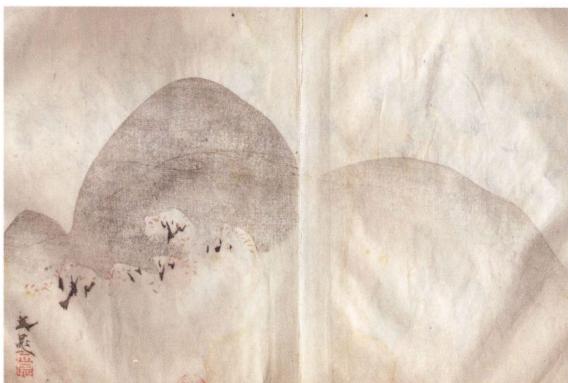
佐羽竹翁



絹桃



梁川星巖



谷文晁



菊池五山



山田芳洲



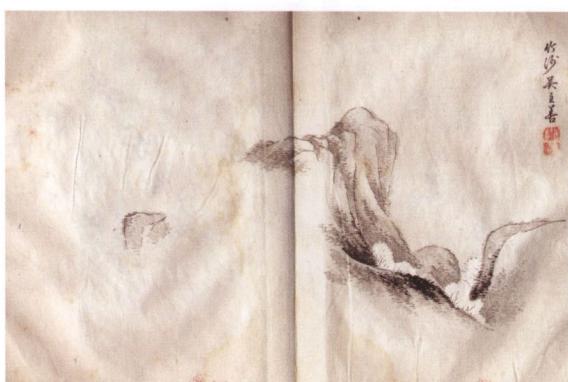
龟田鵬齋



淺野西湖



宮沢雲山



五十嵐竹沙



稻毛屋山（稻毛恭齋書）



谷口月窓



木百年



春木南湖



斎藤天籟



金子金陵



津久井雨亭



桜井秋山



糸井榕斎



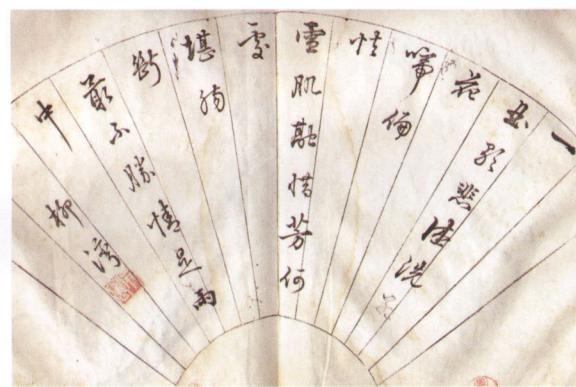
鑄木雲潭



松浦篤所



鍛形蕙齋



館柳灣



谷文一



市河寬齋



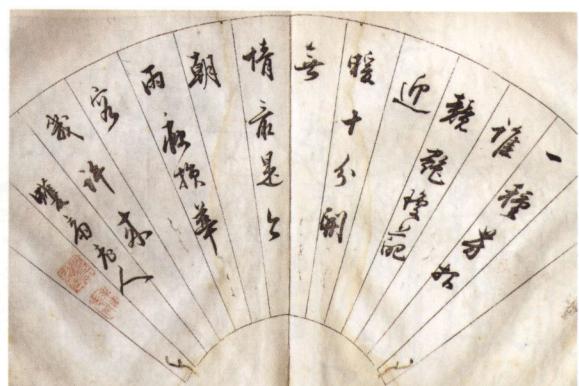
谷舜英



卷菱湖



福田務廉



海野蠶斎



大西圭齋



酒井抱一



喜多武清



大窪詩仙



佐羽淡齋



菅井梅闋「竹林散策図」



高久靄崖「竹嶼医屋図」



見返し扉



谷文晁書「清風」



江稼圃「墨竹図」



春木南湖書「清風」



Kasenruijō and Seifūshū:

the album and anthology of calligraphy and painting in the late Edo period.

YAMADA Isao

The Japanese Bunjinga or Nanga School of literati scholar-amateur artists flourished in the eighteenth and nineteenth centuries, especially during the Bunka era and the Bunsei era. Calligraphy and painting parties (shogakai) and wanderings of bunjin to various places became increasingly popular.

Many of the schools and styles of Japanese art during the Edo period are represented in illustrated books. This essay introduces two albums of Japanese poems in Chinese style and Japanese paintings. One is *Kasenruijō* and another is *Seifūshū*. Major artists and poets are Tani Bunchō, Kameda Bōsai, Sakai Hōitsu, Haruki Nanko, Kuwagata Keisai, Kita Busei, Kikuchi Gozan, Ōkubo Shibutsu. In this album *Kasenruijō*, the influences of Tani Bunchō and Ichikawa Kansai are strong, with many works by his pupils and followers. *Kasenruijō* is an album of 34 works by 34 painters and poets active in Edo in the early nineteenth century. There are 17 paintings and 17 sheets of calligraphy, and the dates are probably all from the spring of 1812. *Seifūshū* contains only works in the literati style. There are 3 paintings and 3 sheets of calligraphy and 57 poems in Chinese style and 22 Japanese songs, and the dates are probably all from 1836 to 1838.

From the dated inscriptions on title by Masuyama Sessai and work by Kaburagi Untan, it is thought that *Kasenruijō* was created immediately for the lamentation of Saba Chikuō, Tansais brother, was dead in february of Bunka 9 (1812), and from the dated inscription on foreward by Kan Gentatsu, it is thought that *Seifūshū* was created for the congratulation on Kamioka Tokuitu's new house named Chikusho Ioku in february of Tenpō 9 (1838).